



すが い かず み
菅井三実

文化表現系教育コース
教授

●「理論と実践の融合」に関する共同研究活動とは、兵庫教育大学のミッションの一つである「教育実践学の推進」をより一層図り、その成果を国内外に発信し、学校現場や教育委員会のニーズに応えるため、平成23(2011)年度から「理論と実践の融合」に関する学際的な共同研究を教員から公募し展開しています。

言語習得理論に基づく 小学校英語教育のプログラム開発 (平成25・26年度「理論と実践の融合」に関する共同研究活動に採択)

【表】用法依存理論における英語獲得の4段階

	特有の表現	平均的な月齢
第1段階	一語文	12カ月
第2段階	軸語スキーマ	18カ月
第3段階	項目依拠構文	24カ月
第4段階	抽象構文	36カ月

平成23(2011)年度に小学5年生と6年生に對して小学校外国語活動(英語教育)が必修化されました。将来的には、中学年への拡張が予想されます。この流れの中で、本研究は、英語圏の子どもが母語としての英語を獲得するプロセスを体系化した「用法依存モデル」という理論に着目し、これを応用することで小学生にも無理のない方法で英語力を付けることができない

かを検証することを目的とするものです。用法依存モデルによると、幼児の英語獲得過程には、表に挙げたような四つの段階があるとされます。まず、月齢12カ月の幼児が使う「一語文」を小学生に導入してみました。一語文は、内容的には複数の語から成る意味を持ちながら形式的には一つの語のように用いられる表現をいいます。例えば、「I want a do-it(それ欲しい)」、「Lemme see(えー)」、「Here we-go(さあ、やろう)などのように、大人から聞いた発話を一つの

「固まり」として認識し、そのまま使えばよいもので、授業でも児童は一語文を非常にスムーズに習得しました。「習得した」と言えるのは、USB型レコーダーを児童の胸に装着し、練習中の児童の発話を確認していたからです【写真】。一語文は、有用な表現なのに中学校以降で学ぶ機会が少ないので、早い段階で導入することが望まれます。

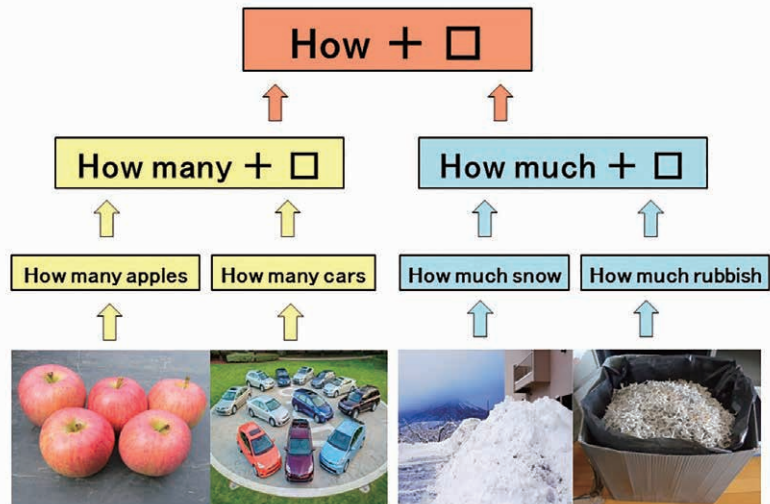


【写真】USB型レコーダー

第2段階の「軸語スキーマ」とは、例えば、「It's + □(それは□だよ)や Where is + □(□はどこなの)などのように、変数(□)と定数を含む短いパターンのことで、変数を入れ替えることで自由に表現を作

れるものです。今回の研究では、可算名詞に対する How many girls や How many apples から How many + □ が習得され、発展的に、How much snow や How much rubbish から How much + □ が習得されることを確認しました。さらに、How long という表現の習得に成功したことから、児童は、もう一

つ抽象度の高い How + □ という軸語スキーマを形成したことが示唆されます【図】。全体の結論として、用法依存モデルの知見は日本の小学校英語教育にも有効であると考えています。今回の結果を基に指導法を体系化し、その考え方や具体的な教材を現場の先生方に提供することが今後の課題です。



【図】軸語スキーマの形成